

病床をもたない総合病院精神科外来の取り組み

キーワード：一般病棟・精神科外来・リエゾン

○発表者名・桑原 照子 共同研究者名・小林 陽子

施設名：社会医療法人社団健生会立川相互病院

I. はじめに

身体の合併症の治療を目的に総合病院へ入院する精神障害者は多い。先行研究では、一般病棟看護師が精神障害者の看護の難しさを感じ、精神科コンサルテーションや精神科看護師への相談を望んでいることが、既に明らかとなっている。しかし、病床をもたない総合病院精神科外来では、精神科専門看護師や認定看護師、リエゾン看護師の就業はなく、一般病棟との連携が図れていないのが現状である。

II. 研究目的

一般病棟でターミナルを迎えた統合失調症患者の一事例を通し、精神科外来看護師が一般病棟看護師と連携を図った結果を考察し、今後のリエゾン看護の可能性を知る基礎資料とすることを目的とした。

III. 研究方法

- ① 研究対象：一般病棟に入院した統合失調症患者
- ② 研究期間：2011年〇月～2012年〇月
- ③ 倫理的配慮：ご本人は既に亡くなっており、ご家族は病弱で同意は得られていないが、研究者が事例報告とともに倫理的な検討を十分に行った内容を、総合病院倫理委員会に提出し、承認を得られた。
- ④ 事例紹介 患者：50代男性 ○氏 無職
病名：統合失調症・大腸癌・膵癌・肝転移
生活史：介護した母が亡くなり喪失感から自殺未遂を繰り返して、30代で統合失調症を発症し治療を開始した。誰かが悪口を言っているなどの被害的な幻聴が中心症状であった。
現病歴：大腸癌手術の5年後に膵癌と診断され手術を受けた。化学療法中の2011年〇月に総合病院精神科外来へ転院した。○氏は自ら話す事はなく、表情もかたく暗い印象でコミュニケーションに問題を抱えていた。2011年〇月に肝転移を認め、2012年〇月に余命3カ月を告知された。2012年〇月に一般病棟に入院したが、1ヶ月後の〇月に亡くなった。

IV. 看護の実際

- ① 入院後の精神科医師の面談への同席
- ② 病室への単独訪問
- ③ 病棟デスカンファレンスへの参加

V. 考察

コミュニケーションに問題を抱えた○氏が、統合失調症という疾患から、一般病棟看護師との関係に支障をきたしていないかと気になっていたが、外来看護師が入院後の患者に関するシステムがないため、

関係をもてずにいた。しかし、○氏が自身の余命を1週間と知ったことをきっかけに、関りをもつ事が出来た。病室で見た○氏は、外来通院時の印象とは違い、笑顔で生き生きとした表情であった。○氏が統合失調症という疾患をもちながらも、一人の患者として平等に受け入れられ、一般病棟看護師と信頼関係を築いている姿を確認することが出来た。このことは、精神科外来看護師が入院患者の看護に参加するきっかけとなった。

一方、自ら積極的に訴えない○氏に対し、一般病棟看護師は寄り添う看護が実践できているのか確信できずにいた。○氏の亡くなった後、病棟デスカンファレンスに初めて精神科外来看護師が参加し、通院から入院までを語った。その情報と入院から亡くなるまでの○氏の心の動きを推察し、だんだんととりもどされたその人らしさ、尊厳、穏やかな最期であり適切な看護が実践されたとの意見で一致した。入院前の○氏を知ることが、大きな意味をもつこととなった。

VI. おわりに

リエゾン看護の必要性を体験できた事例であった。現在、この事例を機に入院患者への病室訪問や医師面談への同席を継続して実施している。また、ケースに応じては関係機関へ連絡し調整を依頼するなどの業務も行っている。今後は病棟との連携を深めるために、カンファレンスへの参加や外来サマリーの作成なども検討中である。

参考文献

- 1) 荒木 富士夫：コンサルテーションリエゾンの実際 岩崎学術出版
- 2) 保坂 隆：ナースのためのリエゾン南山堂
- 3) マリ・ロイド＝ウイリアムズ
緩和ケアにおける心理社会問題 星和書店
- 4) 揚石 怜子・桑原 昌子・佐藤 寿江・岡村 志津英・田渕 幸：一般科病棟看護師の精神障がい者看護に対する意識について 第41回日本看護学会論文集（精神看護） p 40－p 42
- 5) 新谷 由加里・東 千夏・佐藤 達也・北岡 和代・長井 麻希江：一般科病棟看護師が統合失調症患者を看護した経験に関する実態調査 第41回日本看護学会論文集（精神看護） p 138－p 141